

文末形式「名詞＋だ」の成立について

——通時的側面と共時的側面の関係性——

川島 拓馬

キーワード：文末名詞、文法変化、推定表現、意志表現

要 旨

本稿では、「名詞＋だ」の形をとる文末形式について、通時の変化の中で形成されたものと、ある時点において共時的に用法が拡張することでそうした表現が生み出されたものに区別できることを主張する。前者は形式の出現時から徐々に名詞としての性質が失われ一語化していくが、後者は出現した時から既に現代語と同様に助動詞的な性質を有しているという違いがある。筆者がこれまで扱った形式では、「模様だ」「つもりだ」が前者に、「様子だ」「気だ」が後者に相当する。加えて、両者の差が現代語における共時的な名詞の振る舞いの差と関連することを指摘する。前者のタイプでは現代語において名詞としての機能や用法が失われているが、後者のタイプでは名詞として自由に振る舞うことができる。

1. はじめに

現代日本語において、「名詞＋だ」の形をとって助動詞相当の機能を有していると考えられる形式がある。一例として、三宅(2005)の挙げる例を見る¹。

(1) ようだ、はずだ、ところだ、ものだ、ことだ、つもりだ、わけだ

¹ 助動詞相当の機能を持つ形式としては「にちがいない」「かもしれない」なども考えられるが、ここでは「だ」を伴うものに限定して議論を進める。

三宅（2005）は現代語を対象に共時的観点から文法化について論じたものであり、(1)は「助動詞化」として挙げられている形式である。これらの語群は、歴史的に見るともともと名詞であった語にコンピュータの「だ」が後接することで助動詞へと変化した例であり、小柳（2015,2018）においても機能語化（より詳細に言えば、内容語から付属的機能語へと変化した「機能語化A」）の事例として挙げられている²。このように、名詞が「だ」を伴い、それが歴史的変化の中で一語化したことによって、現代語では助動詞として認められるような形式が確認される。

一方、三宅（2005）は類似の機能を持つ名詞として以下のような例も挙げている。

(2) a. それは皆に支持されている考えだ。

b. 彼は辞職する考えだ。

同じ名詞でも、(2a)に対して(2b)は〈意志〉を表しており、助動詞的な性格を持つと考えられる。これは新屋（1989,2014）において「文末名詞」とされたものであり、三宅（2005）は、(1)のような例と比べると名詞の実質的な意味を残しており、完全に助動詞化しているとは言いにくいとしている。このような例に対して青木（2010,2016）は、名詞性の度合いは統語的環境によって異なるとし、文末で用いられることによって名詞性が喪失したものであると考えている。これは現代語という共時態において観察される現象であり、従って「文末名詞」は歴史的変化を経て機能語化したものではないという。

ここまで「助動詞化」という語を使ってきたが、この語が必ずしも歴史的変化を含意しているわけではないという点には注意が必要である。名詞性が乏しく助動詞的・機能的に用いられているからといって、当該の形式が歴史的変化を経て成立したということにはならない。青木（2010,2016）の言う「文末で用いられることによる名詞性の喪失」という現象の存在は、注視すべきであろう。しかしながら、こうした現象が新屋（1989,2014）の挙げる「文末名詞」と重なるものなのかどうかは明らかでない。

本稿では、これまで川島（2017b,c,2018a,b）で扱ってきた「名詞+だ」の諸形式を例として、文末で用いられる助動詞相当形式の性格について論じていく。その際、具体的な用例を通時的に調査することで分かる歴史的側面と、現代語において観察される共時的側面がどのように関連するののかについて述べる。これによって、「名詞+だ」

²ただし青木（2010,2016）では、「ものだ」「ことだ」を歴史的変化による所産と見るべきか否か難しいと述べている。

の助動詞相当形式および「文末名詞」を歴史的観点から考察する意義と、その適切な範囲を示すことが可能になると思われる。

2. 「文末名詞文」との関わり

既に述べたように、本稿で扱う形式は「文末名詞文」（新屋1989,2014）や「体言締め文／人魚構文」（角田1996,2011）として提唱されている構文と重なる部分がある。だが文末名詞文や体言締め文には様々なものが含まれており、その中で特にどのようなものを扱うのかについて、限定しておく必要があると考える。ここでは川島（2016,2017a）において提案した文末名詞文の2タイプを取り上げたい。以下にその別を示す。

(i) Xハ [.....N] ダ

(ii) [Xハ.....] Nダ

(i)タイプは「Xハ—Nダ」という構造を基底とした名詞文であり、Nが抽象的な名詞であるため実質的内容を連体修飾節が担っているようなタイプである。具体的には「性格だ」「立場だ」等が該当する。一方(ii)タイプは「文」に「Nダ」が後接したものであり、補文が埋め込まれた動詞文に近く構造的には名詞文らしくないタイプである。具体的には「予定だ」「見込みだ」等が該当する。この違いは、川島（2016）においてとりたてて詞「シカ」を用いた統語的テストによって示せることを述べ、また川島（2017a）においては両者の構造的差異が表される文内容と関係することを示し、これによって文末名詞文の新たな分類を試みた。

本稿で扱いたい「名詞+だ」の諸形式は、上記の2タイプでは(ii)の方に当たる。上で模式的に示していることから分かるように、文から「Nダ」の部分を切り出せるのは(ii)タイプであり、(i)タイプでは構造的にそれが難しいからである。(i)タイプが新屋（1989,2014）で文末名詞文とされたのは、名詞Nが抽象的であるために主題Xと同一・包含といった集合論的な関係を持たないからであり、文の構造とは関係がない。従って、川島（2016,2017a）で述べたように指定文と見なしてよいものである。文末の助動詞相当形式として「Nダ」を問題にする上では、(i)タイプの文は相応しくないとと言える。(ii)タイプの方は、「文」の後に「Nダ」が接続しているので、この目的に適うものである。

3. 共時的側面から見た文法形式化について

「文末名詞」について、助動詞的な性格を有しているのは共時的な現象であり、必ずしも歴史的観点から捉えられるわけではないという指摘があることを1節で述べた。ここでは文法形式が機能的に用いられていることが共時的側面からどのように捉えられるかについて、複合辞について論じた藤田（2017,2019）を取り上げ、本稿で扱う「名詞＋だ」の考察の一助とする。

藤田（2017,2019）は動詞句由来の複合辞を例に、複合辞であることを支える共時的条件があるとし、複合辞を形成するもとの動詞との関係を考えることが有効であると述べる。その関係には3つの場合があるとし、1つ目として「動詞用法の衰退」を挙げる。

- (3) a. 有里子との別れに際して、秀樹は記念の品を贈った。
b. *秀樹は、有里子との別れに際した。（そして、記念の品を贈った。）
c. *秀樹は、有里子との別れに際した時、記念の品を贈った。
- (4) a. 対立陣営からの批判に対して、小西氏は反論した。
b. *小西氏は、対立陣営からの批判に対した。（そして、反論した。）
c. *小西氏は、対立陣営からの批判に対したので、反論した。

動詞の本来的な働きは述語になることであるが、(3bc)(4bc)ではそれができなくなっており、もとの動詞が主体の動き・あり様を表す表現性を乏しくし、もはや動詞として働くものではなくなっている。従って、「に際して」「にに対して」に含まれる“動詞”部分も動詞句とは分析できず、ひとまとまりの何らかの関係づけを表す形式として機能していることになる。このような場合について、藤田（2017,2019）では「動詞用法が衰えてしまっているということが、こうした複合辞が複合辞である（でしかない）ということを支えている（藤田 2019 : p.20）」と述べられている。

2つ目の場合としては、「動詞用法との意味・用法の分化」を挙げる。

- (5) a. 江口氏はプロだから、状況に応じて臨機応変に処理した。
b. *江口氏はプロだから、状況に応じた。（そして、臨機応変に処理した。）
c. 警察は、犯人の要求に応じた。
- (6) a. 時間がたつ（/時間の経過）に従って、友子はだんだん不安になって行った。

- b. *友子は、時間がたつ（／時間の経過）に従った。（そして、不安になった。）
- c. 友子は、上司の指示に従った。

(5b)(6b)のように言い切りの述語になると容認されなくなるという点は先の例と同じであるが、(5c)(6c)のように可能な場合もある点が異なっている。ところが(5)の「に応じて」の場合、もとの動詞「応じる」では二格に“要求”“依頼”のような意味の名詞句しかとれないのに対して、複合辞はそうではない。(6)でも、動詞「従う」は「指示・命令・要求・規則」といった「従う」主体に何らかの行為・行動を求めるような意味の名詞が典型的に二格に現れるのに対して、複合辞では二格の部分にくるのは専ら節であり、それも“時間の経過・推移”が読み取れるものでなければならない。このように、複合辞ともとの動詞との間で意味・用法が分化していることが、複合辞であることを支える条件になる。

3つ目の場合としては、「動詞用法との断絶」を挙げる。

- (7) 龍谷大学において、学術講演会を行う。

(7)の「において」は、“場所”を表す複合辞として用いられるものであり、「に」＋「おく」＋「て」が複合して出来たものだと分かるが、もとの動詞「おく」がどのような意味の動詞で、どうしてこのような結びつきで“場所”を示す関係表現が生まれたのか見当がつかない。つまり、共時的な意識ではもとの動詞「おく」との繋がりが分からず、もとの動詞と“断絶”しており、結果的に動詞句ならざる関係づけの形式と解さざるを得なくなっている。こうした“もとの動詞との断絶”が、当該の形式が複合辞と見なされることの支えになっている。

なお、藤田(2017,2019)は動詞句由来の複合辞について論じたものだが、名詞由来の複合辞についても同様の見方が可能であるとしている。

- (8) a. 何も知らないくせに、偉そうなことを言うな。
 - b. 頭に手をやるくせがある。
- (9) さんざん迷ったあげくに、断念した。

(8a)の複合辞の「くせに」は、(8b)のような通常の名詞用法である「くせ」とは明確に意味が異なっており、“個人的習慣”といった意味では理解できない³。また(9)の「あげくに」については、「あげく」がもはや通常の名詞用法では使われない。先に挙げた場合で言えば、(8)の「くせに」の事例が「名詞用法との意味・用法の分化」、(9)の「あげくに」の事例が「名詞用法の衰退」に当たるとと思われる。このように、藤田（2017,2019）の「複合辞を支える共時的条件」という考え方が、複合辞が現代語において複合辞として機能し得る理由を示す上で有効であり、それは「文末名詞」に対しても援用可能なものであると考えられる。

4. 具体的事例から見た「名詞+だ」における通時的側面と共時的側面

ここでは、これまで川島（2017b,c,2018a,b）において扱ってきた諸形式を例に挙げ、当該の形式が歴史的に見てどのように成立し現代まで変化してきたか、および現代語においてどのような特徴を有しているかについて見ていく。はじめに推定を表す「模様だ」「様子だ」を取り上げ、次に意志を表す「つもりだ」「気だ」を取り上げる。

4.1 「模様だ」と「様子だ」

はじめに通時的調査の結果から明らかになった点について述べる。川島（2017c）で扱った「模様だ」は近代期、具体的には明治前期の新聞に初めて例が確認され、その後も新聞において継続的に使用されている。「模様」はもともと名詞であり、成立当初は文末位置での使用に特化していたわけではなかった。1880年代には「模様だ」の形で用いられている例が20～25%程度であり、「模様だ」という文末形式が十分に確立していたとは言えない。しかし1920年代後半には80%にまで比率が上昇し、文末形式としての使用へと傾いていることが分かる。更に、「模様」がもともと持っていた（様子）といった意味から隔たりがあると思われるタ形の前接例も、明治期にはほぼ見られず、大正～昭和戦前期で20%程度だが、現代では半数を超えている。ここからも、「模様」の名詞性が薄れコピュラを伴って文末形式と化したことが窺える。「模様だ」の特徴は時代によって変化しており、現代語の「模様だ」は歴史的変化の所産であると言える。

³ただし実際の歴史的な変遷過程を見れば、複合辞の「くせに」と名詞用法の「くせ」の間に連続性を認めることができる。詳しくは川島（2019）を参照されたい。

一方、川島 (2017b) で扱った「様子だ」は近世期から例が見出せる。その時点で既に〈様子〉という意味からそのまま導ける様態用法だけでなく推定用法へも拡張しており、おおよそ現代語と変わらない状況である。ここから、「様子だ」は歴史的变化の結果生じた形式ではなく、名詞「様子」を文末位置で用いたに過ぎないと考えられる。つまり、推定用法が見られるのも共時的な用法の拡張と見なされることになる。

次に共時的側面から行った分析の結果について述べる。現代語において名詞「模様」と「様子」がどのような統語環境で用いられているかについて以下の表にまとめた(調査にあたっては「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を使用)。

【表】現代語における「模様」「様子」の出現する統語環境⁴

		名詞		活用語		複合語	指示詞	単独	計
		非文末	文末	文末	非文末				
模様	用例数	348	34	403	34	479	65	4	1367
	比率(%)	25.4	2.5	29.5	2.5	35.0	4.8	0.3	100.0
様子	用例数	4046	123	2322	2379	136	686	1356	11048
	比率(%)	36.6	1.1	21.0	21.6	1.2	6.2	12.3	100.0

表を見ると、「模様」において活用語を承けて非文末位置で用いられる例が著しく少なく、また修飾を受けずに単独で用いられる例もごく僅少であることが分かる。更に複合名詞の後項で用いられる例も多く、これより現代語の「模様」は従属的な使用が多く、名詞としての自立性が低いと言える。これに対して「様子」は活用語を承けた場合でも特に文末位置に偏ることはなく、また単独での使用例も一定数見受けられる。従って、現代語の「様子」は「模様」とは異なり、名詞性を失っているとは言えない。先にも述べたように、現代語の「模様」のこうした特徴は歴史的变化の中で生じたものであると考えられるが、ここで重要なのは、共時的データのみから「模様」「様子」の統語的振る舞い、すなわち名詞性の程度を捉えることができるということである。現代語という共時態において形式化しているのだから、それを裏付ける共時的な証拠があるはずであり、それは歴史的な経緯とは独立して存在し得るものである。

⁴ 【表】について幾つか補足する。上2段は川島 (2017c) で挙げた【表1】とほぼ同じだが、「その他」の1例は、ここでは除いた。また「様子」について、川島 (2017b) の【表2】で挙げている「様子だ」の用例数とは調査方法が異なるため値は一致しない(本稿の方が網羅的に用例を収集している)。「様子」の「複合語」の例は「様子見」であり、後部要素に名詞が現れる「模様」とは事情が異なるため単純な比較はできないが、便宜上ここに挙げておく。

4.2 「つもりだ」と「気だ」

はじめに通時的調査の結果から明らかになった点について述べる。「つもりだ」の成立については川島（2018a）では直接扱わなかったので、佐田（1974）、土岐（1994,2010）を参考に述べる。「つもり」は動詞「積もる」から派生したものであり、近世前期では「予算・計算」「推測・予想」「意図」「考え」といった広い領域を担っていたが、近世後期になると意志表現としての例が中心的になり「つもりだ」が成立したとされる。ここから分かるように、もともと動詞であったものが意味変化を経て「つもり」という形で意志を表すものとして固定的に使用されるようになったのであり、歴史的変化を経て「つもりだ」が成立したことは明らかである。土岐（1994,2010）では、「つもり」がコンピュータを伴った使用に特化し、「つもりだ」として助動詞化していく過程が詳細に述べられている。

一方、川島（2018b）で扱った「気だ」は近世前期の上方語において用例を確認することができる。この時点で「気だ」「気はない」の形式が成立しており、また後の時期と比較して前接語句の点でも特に大きな異なりは認められない。川島（2018b）でも指摘したように、現代語では限られた場合しか用いられない一人称主体の「気だ」が近代まで見られるが、これは意志表現としての「気だ」が成立した後の変化であり、ここで問題にする通時的変化とは異なる。ここでは、もとの名詞からどのように形式が成立したかという点に焦点を当てて考える。これより、「気だ」は名詞「気」がコンピュータを伴って用いられた場合に意志表現として使用されるということであり、その現象は共時的なものであると考えられる。

次に共時的側面から行った分析の結果について述べる。なお、以下の内容は川島（2018b）で述べたことと大部分が重なっている。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を使用して調査したところ、「つもり」は計 11121 例見られたが、そのうち「つもりだ」（「つもりはない」「つもりがある」も含む）以外の使用例は 159 例にとどまり、これは全体の僅か 1%である。つまり、全体の実に 99%がコンピュータを伴い述部で使用されているのであり、「つもりだ」という助動詞相当形式への偏りが著しいことが分かる。これに対して「気」の場合はコーパスから計 56364 例が確認されたが、そのうちコンピュータ相当句を後接させた用例（「気はない」「気がある」も含む）は 2065 例であった。これは全体の 3.7%であり、「気だ」は名詞「気」の全体から見ればそのごく一部に過ぎないものである。これより、「つもり」はコンピュータを伴って用いられることが専らであり、もはや名詞とは言い難いほどに名詞性を喪失しているが、「気」は名詞としての用法が十分に認められ、その一部として「気だ」という文末用

法があると言うことができる。4.1 節と同様に、これも歴史的な経緯とは別に、共時的データのみから導けるものである。「つもり」「気」に名詞性がどの程度認められるかが、現代語において「つもりだ」「気だ」を助動詞相当形式と見なす際の異なりとして重要なものとなっているのである。

5. 「名詞+だ」の文末形式の成立における2種

前節で見た具体的事例から、「名詞+だ」の助動詞相当形式が歴史的に見てどのように成立したかに関して、2つの類型が認められる。1つは、名詞がもともと持っていた統語的特徴を失い、コピュラと結びつくことによって一語の助動詞と化しているタイプである。先に挙げた事例では「模様だ」「つもりだ」がこれに当たる。これは「名詞性が捨象される」とこれまで言われてきたもので、「名詞」という範疇を脱して述部で使用される助動詞へと移行している点が特徴である。なお、意味変化は名詞の範疇内部でも起こり得るものでありこの類型でなくても生じている。よって、「名詞としての性質を失う」といった際の「性質」とは統語的なもの（具体的には項位置に現れること）を指すことになる。

もう1つは、名詞が名詞としての性質を保ったまま述部で使用されることで擬似的に助動詞的に振る舞い、特定の文法的な意味を担うようになるタイプである。先に挙げた事例では「様子だ」「気だ」がこれに当たる。この場合は名詞自体には変化が起きておらず、名詞がコピュラを伴って文末位置で用いられたに過ぎないと言うことができる。とは言え、どのような名詞であっても助動詞的に機能するというのではなく、2 節で述べたように文から「名詞+だ」を切り出せるようなものに限られる。これは川島（2016,2017a）で指摘したように、文構造を共時的に分析した結果として分かることである。つまり、現代語において助動詞相当と認め得る形式であることを前提に、その形式の成立過程を問題にしているわけである。この類型の特徴としては、名詞の範疇の中にとどまっていることが挙げられ、この点で第1の事例とは異なっている。

この2つのタイプに関して、特に個別の形式に対する説明としてはこれまで指摘がなかったわけではない。前者については現代語に見られるモダリティ形式の成立を扱う研究において言及がなされており、「ようだ」「はずだ」等の形式において実質的な名詞であったものが推定や蓋然性といった機能的な意味を担うようになりモダリティ形式化したことが述べられている。「つもりだ」については4.2 節で述べたように佐田（1974）、土岐（1994,2010）において既に指摘があり、「模様だ」についてもこ

の類型に当てはまると述べたに過ぎない。従って、形式の成立に関わる概念的な説明は先行する研究で示されており、この点で特に真新しい指摘ではない。また青木（2011,2016）が「ようだ」の例を挙げて以下のように説明している。

(10) 古典語：〔連体節（連体形）＋ヤウ〕ナリ。

現代語：〔主節（連体形）ヨウダ〕。

「連体節＋やう」という名詞句にコピュラの「なり」が後接していたものから、主節すなわち文末に「ようだ」が付加したものへと構造が変化している。この変化に当てはまるのが第1のタイプで、当てはまらないのが第2のタイプと言える。

これに対して、後者のタイプについてはこれまであまり明確には指摘されてこなかったが、青木（2010,2016）で「文末名詞」について言及する際に同趣旨のことを述べている。それによれば、名詞節は述部で用いられると名詞性が低減し、「文末名詞＋だ」が助動詞的に振る舞うのはそれが要因であるという。結論として「文末名詞」は「ようだ」「はずだ」とは異なり歴史的变化を経て機能語化したものではないと述べる。この指摘は妥当なものであると考えるが、青木（2010,2016）においては「文末名詞」の指す範囲が明確でない。新屋（1989,2014）の言う「文末名詞」には「立場」「性格」のようなものも含まれ、これは川島（2016,2017a）で（i）タイプとしたことから分かるように、文から「名詞＋だ」を切り出すことができない。こうしたものはそもそも助動詞的に機能しないので考察にあたって大きな問題とはならないかもしれないが、扱う対象がどの程度の広がりを持つかについては意識しておく必要がある。川島（2017a）で指摘したように、「文末名詞」の内実は多様であり、その規定は消極的なものにとどまらざるを得ない。

6. 「名詞＋だ」の文末形式における通時的側面と共時的側面の関係

前節では、「名詞＋だ」の文末形式の成立過程について、歴史的観点から見ると2種類のタイプに区別されることを述べた。ここでは、その2タイプが共時的側面からの分析とどのように関係するかについて述べる。まず歴史的变化の結果として形式が生じたタイプについては、共時的に見ると名詞としての使用に制限が見られるという点が指摘できる。「模様」は4.1節で述べたように、現代語において従属的な使用が大半を占めている。「名詞＋の」の形をとるか、活用語を承けるか、複合名詞の後項

となるかして、何らかの修飾を受けなければならない、単独で用いられることはほとんどない。また活用語を承けた場合は文末位置での使用、つまり「模様だ」という形での使用に大きく偏り、専ら文末形式として機能し、項位置で用いられることは稀であることが分かっている。これより、格助詞を後接させ項として振る舞うという名詞の本来的な機能が弱まっており、現代語において「模様」は名詞性が希薄であると言うことができる。また「つもり」についても 4.2 節で述べたように、現代語においてはほぼ全てが「つもりだ」の形で用いられており、「つもり」は助動詞の一部であってもはや名詞とは言い難い⁵。

この 2 形式について、3 節で言及した藤田 (2017,2019) の考え方を踏まえて見てみると、「模様だ」は「名詞用法との意味・用法の分化」、「つもりだ」は「名詞用法の衰退」に該当すると言える。「模様」については、4.1 節の表に示したような出現位置に関する制約が存在するが、〈様子〉といった意味で用いられる場合は、以下のように問題なく項位置に現れることができる。

(11)a. 首脳会談は、両者ともに平行線をたどった模様です。

b. これより、首脳会談が行われている模様をお伝えします。

c. これより、首脳会談の模様をお伝えします。

d. 首脳会談は、昼過ぎから急に {*模様/様子} が変わったようです。

e. この浴衣は、模様が珍しい。

(11c)のような例はごく普通に見られ、この場合(11a)の「模様だ」とは用法が分化していると考えられる⁶。文末位置で使用される「模様だ」は認識主体が背景化され報道文体に用例が偏るが、通常の名詞用法ではそのような特徴は見られない。このように、共時的に見ると「模様」の用法が分化していることによって、助動詞相当形式として

⁵ 「つもり」にコンピュータ相当句が後接したもの以外の例としては「つもりになる/する」「つもりをする」といったものや、後は「つもりだ」をメタ的に使ったものが挙げられる。いずれも「つもりだ」の意味用法から離れたものではなく、現代語において「つもり」が名詞として自由に振る舞えないという点は変わらない（ここでは「つもりだ」「つもりはない」「つもりがある」に限ってコンピュータ相当句としたが、寧ろ「になる/する」等を含めてもよいかもしれない）。また川島 (2018a) において「つもりはない」の一部には「つもり」が自立的に振る舞っているかのように思われる例があることを指摘したが、これも助動詞としての用法の域を出るものではないため特に問題とはならない。

⁶ (11b)は取り立てて不自然というわけではないが、川島 (2017c) でも述べたように、活用語を承けて項位置で使用される例は少なく、実際にはこのような例はあまり見られない。

の「模様だ」の存在が支えられていると考えられる。なお、〈図柄・文様〉の意で使われる場合は(11e)のように修飾要素は必須ではなくなる。これより、この場合まで含めるのなら「模様」の意味・用法は3層構造を成しており、それによって統語的な制限が異なると言うことができる⁷。一方「つもりだ」については、そもそも現代語において「つもり」という名詞が存在しないため、これによって「つもりだ」が助動詞相当形式として機能していることになる。歴史的に見ても、土岐（1994,2010）では「つもり」の用法が制限されることをもって、「つもりだ」の成立を検証している。名詞用法が衰退していることから、もはや「つもりだ」を機能語と見なすほかはない。

これに対して、共時的な名詞性の低減によって形式が現れたタイプについては、現代語において名詞の使用に制限は見られないという点を指摘することができる。4.1節の表で挙げたように、「様子」はどのような統語位置で用いられるかについて特に制限はなく、修飾を受けない例もごく普通に見られる。「様子だ」には推定の用法もあり、助動詞相当形式と言えるが、「様子」自体は名詞としての本来的な機能を有しており、名詞性を失ってはいないと考えられる。「気」に関しては、4.2節で述べたように文末位置での使用に特化してはいない。修飾要素を持たない例としては、「気がつく」「気に入る」「気が利く」など慣用的な表現に限られるが、用例数・バリエーションともに非常に多く見られる。修飾要素を持つ表現としては「気がする」「気になる」などが挙げられ、「気だ」もその中の一つと言えよう。また意志を表す表現でも、川島（2018b）で指摘したように「気が起こる」「気が失せる」などコピュラ以外の様々な動詞と「気」が結びつく表現が見受けられる。これより、名詞「気」としてかなり自由に振る舞うことができ、内容語と見なすべきものである。

このように、現代語において名詞性を充分に持ちながらコピュラと結びついて助動詞的に機能する一群があることを指摘した。ただしどのような名詞であってもよいわけではない。2節で述べたように、ここでは「文末名詞文」のうち(ii)タイプ、すなわち文から「Nダ」を切り出せるようなものを考察の対象としている。これに当たらない「立場だ」「性格だ」なども、確かに「立場」「性格」という名詞自体は名詞としての機能を問題なく有しているが、助動詞として認め得るような「文法的機能」が見られない。そうした機能が見られなければ「名詞+だ」として考察する意義はな

⁷ 〈図柄・文様〉の例は明らかに他の場合とは意味が異なっており、また中間的な例（分類に際して迷う例）も見られなかったことから、〈様子〉の意で使用される場合と〈図柄・文様〉の意で使用される場合とは、現代語においては同音異義語と見なしても差し支えないように思われる。もちろん、歴史的に見れば両者は同源であると考えられる。

いため、ここでは問題としない。こうしたものを除外するために、川島 (2016,2017a) で提唱したテストを用いたのである。

以上は対象を選定する上で既存の枠組みを前提として用いたものだが、これ以外にも「共時的な名詞性の低減によって助動詞的に機能するタイプ」を切り出すための考え方について述べたい。それは、「もとの名詞の意味・用法からの予測不可能性」である。これまでと同じく、「様子だ」「気だ」を例に説明する。まず「様子だ」においては、聴覚情報による推定を表していると思しき例が見受けられる。

(12) 襖をへだてて、隣にも旅人がいる。月が出ているのがうれしいのか、寝ずになにごとか話している様子だ。正興たちも簾をあげ、月を見ながら歌を詠んだ。

(中江克己『江戸の遊歩術』)

(13) 何やら不穏な気配を感じて振り返ると、離れたところにクロネコが… 抜き足差し足で、近づいてきます。ばさばさ羽音がするので、うさ畑のすぐそばに、さっきのキジがまだいる様子。

(Yahoo!ブログ)

(12)は「襖をへだてて」とあり、隣にいる旅人の存在を実際に見たわけではなく聞こえてくる話し声を頼りに推定している。(13)も、「キジがまだいる」と判断した根拠は「羽音」である。川島 (2017b) では「様子だ」の基本的意味を「XはYに見える」と捉え、おおよそそれで説明可能なのだが、(12)(13)のような例外も少数ながら見られる。こうした例において「視覚的に捉えられた〈様子〉」は存在しない。「様子だ」の推定用法が定着したことによって、必ずしも視覚的な〈様子〉の存在しない(12)(13)のような例にまで用法が拡張したと考えられる。こうした例の存在は「様子」という名詞の意味からは導き出せず、推定という文法的機能を担う形式として「様子だ」が認められることになる。これは、「様子だ」を助動詞相当形式として見なす理由にもなる。また、川島 (2017b) でも既に述べているが、「様子だ」には過去の事態を推定する用法が僅かながら見られる。過去の事態は話し手が直接認識できないため、この用法は〈様子〉の語義からは離れている。こうした例の存在も名詞の意味からは予測できず、従って「様子だ」を助動詞相当と考え、分析の対象とすることには意義が認められる。

次に「気だ」においては、「気」という名詞の語義の広さに比して「気だ」の用法が意志に著しく偏ることが指摘できる。川島 (2018b) でも述べたように、「気だ」の前接語句の形態を見ると動詞ル形がその大半を占め、動詞タ形やテイル形、形容詞

が前接する例は極めて少ない。しかし「気だ」に限らず名詞「気」全体として見れば、そうした語句が前接する例はごく普通に見られる。特に「気がする」「気になる」などの慣用表現においてそうした例は多く見られ、「気だ」に比べ前接要素が特定の形態に集中しているわけではないと言える。これは「気」の意味からは予測できず、コピュラと結びついた「気だ」の特徴として形式に備わっているものと考えられる。

「気」を用いた慣用表現の一つである「気がする」の変化について考察した蔵本（2018）では、「気」の意味を維持した表現から、「気」の意味を希薄化させた表現へと変化していると指摘する。具体的には、明治・大正期と現代を比較して様態・引用形式の前接する例が減少していること、また形容詞が前接する場合「気」を「気持ち」に置き換えられる例が減少していることを挙げ、これによって「気がする」単独で認識的意味を捉えられるようになったと述べる。こうした指摘は、同じ「気」を用いた表現であっても「気だ」には当てはまらないと思われる。「気だ」は成立当初から意志表現への偏りが強く、現代にかけて変化してきたとは言えないからである。

「気」の意味も特に希薄化しているとは考えられず、近世期および明治・大正期においても形容詞（特に感情形容詞）が「気だ」に前接する例はほとんど確認されない。よって、もともと「気持ち」相当の意味を表していたとも言えず、「気がする」とは形式成立のあり方が異なっていると考えられる。文末形式としての「気だ」は意志用法と強く結びついており、それは名詞「気」とコピュラ「だ」の意味からは直接導き出すことができない。このことは、「気だ」を助動詞に相当する形式として認め分析することの意義を示していると言えよう。

7. 助動詞相当形式の2種が意味するもの

4 節から 6 節までは具体的な形式を取り上げて「名詞+だ」に関する通時的側面と共時的側面の対応関係について述べてきたが、以下ではこうした助動詞相当形式の2種について概念的な説明を試みる。

まず通時的側面と共時的側面ともに、ある特徴が見られるか否かという点で区分しているため、必ずいずれかの類型に含まれることになる。通時的側面に関して言えば「歴史的変化を経て生じた形式か否か」という基準であり、共時的側面に関しては「現代語において名詞の使用に制限があるか否か」という基準である。このうち特徴の見られない方も、単なる「その他」に当たるわけではない。通時的側面では、「歴史的変化を経ていない」というのは名詞が述部位置で使用されることによって共時的

に名詞節の名詞性が低くなるという現象によるものであり、これは青木（2010,2016）で指摘されている。主節は主文の叙述を司るものであり、述語（名詞に前接する部分）が述語らしく振る舞える位置であると言える。このように具体的にメカニズムが示されており、「歴史的変化を経ていない」タイプに対してもその特徴は積極的に規定されている。なお、共時的に節の名詞性が低減していない場合も理論上はあり得るが、その場合は文末名詞文から「名詞+だ」を切り出して問題とすることができない、すなわち（ii）タイプに含まれないため、そもそも考察の対象となっていない。共時的側面では、「名詞の使用に制限がない」タイプであれば何でもよいわけではないことを既に述べた。文末名詞文の（ii）タイプに考察対象を限っていることはもちろん、6節で触れたように、もとの名詞の意味・用法から予測できないような用法上の特徴が認められる必要がある。このように、分析に当たって意義のある対象を選び出すような限定を設けており、「名詞の使用に制限がない」タイプにも等質性が保証されることになると思われる。

次いで、通時的に見た成立の経緯と現代語における名詞の共時的振る舞いが対応することについて説明を加える。歴史的変化によって名詞性が捨象されその結果生じた形式は、現代語において名詞として使用されるのに何らかの制限がある。名詞性が捨象されたのだから現代語で名詞としての特徴を欠いているのは当然のことであり、両者が対応する理由はこのように説明することができる。また名詞性を維持したまま擬似的に助動詞的に振る舞う形式は、現代語において名詞としての使用に制限がない。これも、名詞性が失われたわけではないのだから名詞として自由に使用できるのは当然である。通時的な変化の結果として現代語という共時態があるわけなので、両者が対応するのは自然なことであると思われる。通時面と共時面の観察は独立して行うことが可能なので、これは単なる同語反復ではない。このような対応が存在することは、別個に分析できる言語の通時面と共時面が密接に関係すること、すなわち現代語という共時態の歴史性を示していると言えよう。

このように「名詞+だ」の助動詞相当形式に関する通時的側面と共時的側面に対応が見られることを述べたが、両者が結びつかない場合があるかどうかについて以下で検討したい。まず歴史的変化によって名詞性が捨象された結果生じた形式が現代語において名詞の自由な振る舞いを許しているようなケースだが、コンピュータと結びつき一語化しているにもかかわらず、それ以外の使用が制限なく行われることは考えにくいのではないだろうか。助動詞としての意味と名詞としての意味が完全に分かれていればそのような場合も考え得るが、それは「模様」のように名詞用法と意味・用法が分

化していると言える。これも制限の一種であるため、そのようなケースは想定し難い。次に名詞性を維持したまま助動詞として振る舞う形式で現代語において名詞の使用に制限のあるケースだが、名詞としての統語的特徴や実質の意味を残しているにもかかわらず自立的に用いられないとするなら、何らかの別の要因が必要であると思われる。つまり、当該の名詞は名詞としての特徴を有しているものの文末での使用に特化しているというような場合だが、これは考えにくいだろう。特定の位置での使用に偏っているのならば、名詞性を維持しているとは言えないからである。以上、通時面と共時面の対応に齟齬をきたすような事例は理論上想定しづらいことを述べた。よって、両者の対応が単なる偶然ではないことを補強し得るものと言える。

最後に、助動詞相当形式がどのような要因でもって助動詞たり得ているのかについて述べる。まず歴史的変化の結果として生じたタイプは、名詞用法が衰退しているか、もとの名詞と意味・用法が分化している場合に助動詞として機能し得ると考えられる。これは藤田（2017,2019）の考え方に倣ったものであり、名詞の振る舞いに関する共時的な条件である。「名詞＋だ」の名詞部分が、コピュラを後接させるという形式的特徴を残すのみで実質的にはもはや名詞として捉えられなくなったことで、「名詞＋だ」が助動詞として機能することになる。これは現代語における共時的な様相に関することであるが、こうした様相となった要因には歴史的変化が存在する。次に共時的に助動詞として振る舞うタイプは、川島（2016,2017a）で主張したように、文構造として文末から「名詞＋だ」を切り出せることが挙げられる。更に6節で述べたように、もとの名詞の意味・用法から予測できないような用法を持つことも重要な点である。これによって、単なる名詞述語文とは区別され、文末の「名詞＋だ」が助動詞として機能することになる。このように、助動詞相当形式の2種は、助動詞として機能するための共時的な条件においても異なりを見せるのである。

8. おわりに

本稿では「文末名詞文」の中で「名詞＋だ」が助動詞的に機能するものについて、通時的側面と共時的側面から分析することによって、2種類のタイプに区分できることを明らかにした。具体的な形式を例として、歴史的に見た成立の経緯および現代語における名詞の振る舞いという点で2つのあり方が想定され、両者が対応することを示した。また通時面と共時面の関係性について、概念的な説明も試みた。

語を内容語と機能語に分ける考え方は一般的なものだが、本稿での試みはその「機能」がどのように保証されるのかを考察したものである。内容語に由来する形式はこれまで機能語化によって生じたものが数多く取り上げられてきたが、歴史的变化を経ずに機能的に振る舞うタイプについてはあまり注目されてこなかった。後者のタイプに言及するためには「機能」がどのような要因で生じ、またどのような条件で「機能」と認められるかについて考える必要がある。これによって、現代語に存在する文法的機能を担う種々の表現を取り扱うことが可能になると思われる。具体的事例が未だ乏しいことは問題であり、本稿で主張した考え方がどの程度有効であるのか、更なる検証が求められるだろう。

参考文献

- 青木博史 (2010) 「名詞の機能語化—形式名詞を中心に—」 『日本語学』 29-11, pp.40-47, 明治書院.
- 青木博史 (2011) 「述部における名詞節の構造と変化」 青木博史(編)『日本語文法の歴史と変化』 pp.175-194, くろしお出版.
- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』 ひつじ書房.
- 川島拓馬 (2016) 「「文末名詞文」の構文的位置づけ」 『語文論叢』 31, pp.13-30, 千葉大学文学部日本文化学会.
- 川島拓馬 (2017a) 「構造と分類から見た「文末名詞文」の位置づけ」 『筑波日本語研究』 21, pp.53-78, 筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室.
- 川島拓馬 (2017b) 「様態・推定表現としての「様子だ」—ヨウダの史的変遷との関わり—」 『日本語と日本文学』 61・62, pp.29-45, 筑波大学日本語日本文学会.
- 川島拓馬 (2017c) 「文末形式「模様だ」の成立と展開」 『日本語の研究』 13-3, pp.1-17, 日本語学会.
- 川島拓馬 (2018a) 「近世・近代における「つもりだ」の用法変遷」 『筑波日本語研究』 22, pp.105-133, 筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室.
- 川島拓馬 (2018b) 「意志表現「気だ」の特徴とその史的変遷—「つもりだ」と比較して—」 『国語と国文学』 95-12, pp.53-67, 東京大学国語国文学会.
- 川島拓馬 (2019) 「逆接形式「くせに」の成立と展開」 『国語国文』 88-4, pp.55-68, 京都大学文学部国語学国文学研究室.

- 藏本真由（2018）「前接要素・形態的特徴からみる「気がする」の意味変化」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究』37, pp.75-90, 和泉書院.
- 小柳智一（2015）「文法変化の方向」『KLS』35, pp.323-334, 関西言語学会.
- 小柳智一（2018）『文法変化の研究』くろしお出版.
- 佐田智明（1974）「「はず」と「つもり」」『北九州大学文学部紀要』10, pp.41-53, 北九州大学文学部.
- 新屋映子（1989）「“文末名詞”について」『国語学』159, pp.1-14, 国語学会.
- 新屋映子（2014）『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房.
- 角田太作（1996）「体言締め文」鈴木泰・角田太作(編)『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文集』pp.139-161, ひつじ書房.
- 角田太作（2011）「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1, pp.53-75, 国立国語研究所.
- 土岐留美江（1994）「意志表現としての「つもり」の発達—モダリティ化への歴史的変遷—」『都大論究』31, pp.81-96, 東京都立大学国語国文学会.
- 土岐留美江（2010）『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房.
- 藤田保幸（2017）「複合辞であることを支える共時的条件—動詞句由来の複合辞を中心に—」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』26, pp.81-93, 龍谷大学グローバル教育推進センター.
- 藤田保幸（2019）『複合助詞の研究』和泉書院.
- 三宅知宏（2005）「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1-3, pp.61-76, 日本語学会.

付記 本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費・課題番号 18J10064）の助成を受けたものである。

かわしま たくま／人文社会科学研究科